テレポーテーション・マン３　登場人物

ジョン・ダーウェル（７７）　農業学者
ステファニー・ミラン（３３）　医師
キャリー・ミラン（４）　ステファニーの娘
ジェシー・ダグラス（３６）　パイロット
　ステファニーの夫
岡田鉄男（３３）
　テレポーテーション・マン
ライアン・ホール（４０）　保安官
メラニー・シングルトン（５３）
　東キャナル市・市長
クリスティン・コートニー（４３）
　市議会議長。
ダニエル・アルメンダリス（５６）
　東キャナル大学学長　物理学者
ゴードン・ローリン（５４）　危機管理主幹
杉田龍之介（７３）　小太刀の名手
杉田静（しず）（７１）　龍之介の妻
イワン・ドブゾロフ（５５）ロシアの独裁者

アナベル・ヴァルツ（アフリカ系・３６）
ロベールの妻・ナビゲーター
ユーアン・フラナリー（３０）　パイロット
ジャーナ・ムペキ（５６）　中央病院院長
周浩然（チョウハオラン）（４７）中華人民共和国・火星基地司令官
李芳（リファン）（２７）　周の元妻・朱星宇（チュシンユー）の妻
朱梓晴（チュズーチン）（１３）　朱星宇（チュシンユー）の娘
朱星宇（チュシンユー）（３６）中華人民共和国・火星軍副司令官
王靜（ワンジン）（３５）　中国軍兵士
張敏（チャンミン）（４４）　中国軍兵士
黄李（フウアンリ）（３９）　周派兵士
黄月（フウアンユエ）（３９）　黄李（フウアンリ）の妻
通信技師（２２）

テレポーテーション・マン3

T　2141年

○東キャナル運動競技場駅

路面電車の扉が開いて、数人の人が降りる。

その中にアナベル・ヴァルツ（36）と岡田鉄男（33　テレポーテーション・マン）の姿が。

無料乗車なので改札は無い。

そのまま、駅舎の屋根の下を抜けて、数軒の住宅の方へ歩いてゆく。

○ジョンの家

黄色い家の前にやってくる。

鉄男「あの、今日からここでは、あなたのことを。姉さんと呼びます。男女のけじめをつけるためです」

うなずくアナベル。

扉をたたく鉄男。

しばらくして、ジョン・ダーウェル（77　農業学者）が扉を開ける。

ジョン「おお！

テッッオ、帰ってきたか！」

鉄男「入院中はお見舞いありがとうございました。

退院の許可が出たので帰ってきました」

ジョン「おお、そうか。

それはなによりだった。

そのご婦人は？

どこかでみたような」

アナベル「病院でお目にかかりました。

アナベル・ヴァルツと申します。

どうぞよろしく」

ジョン「はいはい。

えーっと、あのー」

鉄男「アナベル、この方は私の義父のジョン・

ダーウェルさんです」

アナベル「お世話になります」

ジョン「うんうん。

こんなところで立ち話もなんだから、入ってください」

アナベル「はい」

○居間

テーブルが一つと、鉄製のシンプルな椅子が５つ。

それぞれ椅子に座る。

鉄男「ジョン、これからアナベルはここで一諸に暮らします。いいでしょ？」

ジョン「あの・・・、二人は・・・その・・・」

鉄男「私の新しい姉です」

ジョン「はあ？」

鉄男「詳しいことは後で」

ジョン「うん、まあ、そうだな」

鉄男「姉さん、先にシャワー浴びてきて。最高気温２９度で汗をかいてるだろうから」

アナベル「そうね。ダーウェルさん、いいですか？」

ジョン「うん、いいとも」

鉄男、立ち上がり、アナベルを誘導。

鉄男「そこがシャワー室。着替えを持って入ってね」

アナベル、着替えの入ったバッグを持って、ドアの中へ。

ジョン「いったいどうなってるんだ」

鉄男「実はね・・・」

鉄男、食材を揃えて、アイランド・キッチンで料理をはじめる。

鉄男がアナベルの身に降りかかった災難を話す。

窓の外は、ようやく陽が落ち始め、庭に咲いたコスモスが風に揺れている。

ジョン「そうか、そういうことか。つまり、彼女は君の傍にいると、レイプの記憶が薄れるんだな。それはいいことだ」

鉄男「彼女が回復するまでどのくらいかかる

かわからないけど、一緒に住んでいいですか」

ジョン「いいとも」

○同・居間（夜）

3人がテーブルについている。

ジョン「さあ、テッツオの名料理を頂こう。無事帰ってきた二人に乾杯」

一同ビールを飲む。

アナベル「すみません、手伝わなくて」

鉄男「いや、気にしないで。それに日替わりで料理当番が回ってくるから。あしたは姉さんですよ」

アナベル「ええ」

ジョン「野菜入りポテトサラダにトマトと豆腐のすまし汁とパン。うまそうだな。どれどれ。うん、うまい」

鉄男「お替りありますから」
アナベル「ほんとにおいしい。
あなた上手ですね」
鉄男「一人暮らしが長かったから」
ジョン「あしたの予定は？　」
鉄男「杉田先生のところへ、退院のあいさつに行ってきます」
ジョン「誰だそれ」
鉄男「ああ、ご存じなかったですかね。マーズ５１号で戦うために剣を教えてもらった先生です」
ジョン「それで上手になったのか？　」
鉄男「いや、それはなんとも。でもおかげで７人倒せましたから」
ジョン「７人も！　それはすごい」
アナベル「明日、私も連れて行ってください。自分の身も守れないことが、今度のことではっきりしましたから。私も剣を習いたい」

鉄男「いいでしょう。
心の健康にはぴったりです」

○杉田の家の前
草原の中の一軒家。
突然、鉄男とアナベルが現れる。
二人は玄関に。
戸を叩く鉄男。
扉が開いて、杉田の妻、静（しず）（７１）が
現れる。

静「あら、岡田さん！　」

鉄男「病院へのお見舞い、ありがとうございました」

静「さあどうぞ上って」

○杉田家の居間

杉田（７３　小太刀の名手）「おお、治ったか。
よかった、よかった」

静「この方、病院で同室の・・・」

アナベル「アナベル・ヴァルツです。

アナベルと呼んでください」
鉄男「それからこのアナベルも剣を習いたいと」
杉田「それは殊勝な心掛けである。やはり小太刀(こだち)か、それとも薙刀(なぎなた)か」
アナベル「私は大刀(たち)を習いたいと思います」
杉田「さあ、それはどうかな。大刀は小太刀より重いぞ。そなたに扱えるかな」
アナベル「とりあえず見せてください」
杉田「よし、しばらく待て」
と、奥の部屋へ。
暫くして一振りの刀を下げてくる。
杉田「これが打太刀(うちがたな)という日本刀だ。持ってみろ」
アナベル、こわごわ刀を両手で持ってみる。
杉田「重さ８００ｇ、長さ７０ｃｍ、火星仕様で少し軽くしてある」
アナベル「ほんと、思ったより軽いですね」

杉田「打刀は、主に片手で使う。
だから、片手で持ってみろ」
アナベル「ああっ、なるほどこれは重いですね」
杉田「そうであろう。
部屋の中で振り回すのは危ういから、表に出よう」
と、さっさと一人で玄関へ。
後を追うアナベル。
静「勇ましいお嬢さんですこと」
鉄男「これには訳が・・・」
と、彼女の災難を手短に話す。
静「まあ、そうだったの。
大変な覚悟があるのでしょうね」
鉄男「ええ、一人でもやもや悩んでいるよりは、剣術で心の闇も断ち切れるのではと思い、連れてきました」
静「そうね」
鉄男「あの、先生の、もともとのお仕事は」
静「鍛冶屋です。

火星で鋤や鍬などの農具が必要と知って、二人して移住審査を受けて合格しました。こちらへ来て、製鉄所の近くで農具を作っていました。

火星へ来て２年後に娘が生まれましたが、３歳で死んでしまいました。

それから、ここは江戸時代であると勘違いするようになり、あちこち歩きまわって砂鉄を集めて、電気炉で溶かし、刀作りを始めました。

農具もそうですが、重い槌を振り下ろす助手が居ないため、機械で圧延して、一人で刀を作り上げました」

鉄男「へえ、そんなご苦労が」

静「あ、表はどうなってるかしら」

鉄男「見に行きましょう」

○杉田家の前の草原

帯を巻いたアナベルはそこに刀を差して、杉田の教えを乞うている。

杉田「そうだ。
最初は早く抜こうと思ってはいけない。
刀はよく切れる刃物だから、あわてると必ず怪我をする。
慌てず、ゆっくりと。
そう、それでいい、最初は」
アナヘル「片手で操作するとおっしゃいましたが、両手のほうがやりやすいのでは」
杉田「そう言ったか。
すまん、間違いだ。
昔はそうだった。
地球の刀は、刀身を支える茎(なかご)が柄(つか)の中に仕込まれていたが、それが短く、両手で振り回していると、柄が折れることがあった。
わしが作った刀は、柄の最後まで茎が通っているから、両手で振っても大丈夫だ」
アナベル「はい」
杉田「ゆっくり抜いて」
アナベル、鯉口を切って、スルリと刀を抜く。

正面に、両手で握った刀を振り下ろす。

杉田「うん、筋がいい。

岡田よりいい」

鉄男「ええっ？

殿、それは無いでしょう」

杉田「誠だから仕方がない」

鉄男「はあ」

杉田「さあ、真剣はそこまで。

模造刀で練習じゃ」

杉田、アナベルに模造刀を渡し、自身も模造刀を差して、アナベルと対峙する。

鉄男「殿、危機管理セクションに出勤しますので、拙者はこのまま失礼仕ります。

お姉さん、後で迎えに来ますから」

アナベル「はい」

鉄男「じゃあ、失礼」

鉄男の姿は消える。

○市庁舎・鉄男の個室

現れた鉄男、危機管理室のドアをノックして扉を開く。

○危機管理室

ゴードン・ローリン（５４　危機管理主幹）「やあ」

鉄男「おはようございます」

部屋には、メラニー・シングルトン（５３）市長、ライアン・ホール（４０）保安官と、数名の技術者。

ローリン「ちょうどよかった。通信テストが始まるところだ」

鉄男「何のテストですか？」

ローリン「一年がかりで構築した宇宙通信システムだ。宇宙発電所は、火星面に対して常に同じ位置にあるため、送受信機器を設置して、その機器のカバーできる範囲内での直接通信が可能になる」

鉄男「どのくらいの範囲での通信ができるの

ですか？」

ローリン「一機の発電所が、火星地表直径４５００ｋｍの範囲だ」

鉄男「何のために」

ローリン「火星表面を動き回っている何台もの探査機と通信するためだ。加えて、次の火星コロニーの建設地域選別にも役立つ。じゃ、スイッチを入れる」

ローリンが青いボタンを押すと、モニター上にいくつもの色違いの線形が浮かび上がる。

ローリン「これが東キャナル上空の第一発電所からのデータだ。何年もかかって、今ある６基の発電所すべてに通信機を設置して、少なくとも赤道面での通信が可能になる」

鉄男「すばらしいですね」

シングルトン「じゃあ、市長室に移動して、今日の定例会議を始めましょう」

一同が立ち上がって動き出したとき、
通信機のスピーカーから英語の人の
声が。
謎の声「ＳＯＳ　ＳＯＳ　助けてください。
ＳＯＳ　ＳＯＳ！」
ホール「なんだ、これは」
通信技師がマイクのスイッチを入れる。
通信技師（２２）「こちら東キャナル、東キャ
ナル！
どなたですか？」
朱星宇（チュシンユー）（３６　中国火星基地副司令官）「あ！
よかった！　通じた！」
通信技師「あの、どなたですか？」
朱星宇「私は中華人民共和国・火星基地副司
令官朱星宇と申します。」
ローリン、マイクを渡されて
ローリン「こちら東キャナル市のローリンと
言います。
中国ですって！」
朱「はい、そうです」

ローリン「ずいぶん前、中国が火星に宇宙船を送った、ということは知っていましたが、正確な位置は知りませんでした」

朱「こちらはマリネリス渓谷の西カンドール・カズマです」

ローリン「細かい経緯は？　」

朱「東経２８５度のカズマから南に１４２ｋｍのところです」

ローリン「いつ頃到着したのですか？　」

朱「２０８５年です」

ローリン「そこには水はあるのですか？　」

朱「火星協会の火星地図と実測から、川が流れているのを確認して、実際幅３０ｍの川がありました」

ローリン「何人ぐらいの移住者が居るのですか？　」

朱「最初６６人でしたが、それから増えたり減ったりで現在２７０人います。計画でゆくと５００人になるはずでしたが」

ローリン「ところでＳＯＳの意味は？　」

朱「食糧事情が芳しくなく、いつも空腹の状態が続いています。本国からの新しい入植者も資材も途絶えてこれ以上人口を増やせないのです。加えて、このままいくと、ほとんど全員が

血族結婚になりかねません。
今もいとこ同士の結婚はあたりまえです。
今から１５年前から毎日ＳＯＳを発信しつづけておりました。
通信アンテナが壊れて地球と通信もできません」
ローリン「それはたいへんだ。
なんとか助けてあげたいが・・・・」
シングルトン市長「しかし、（火星地図を見ながら）こちら東キャナルから、そちら西カンドールまではおよそ３３００ｋｍ、たいへんな距離です」
鉄男「３３００ｋｍといえば、地球で言えば、ほぼ日本列島の長さ。
ジェットで飛ぶと、たぶん４時間」
ローリン「ジェット機なんかない。
船の通る航路もありません」
朱「うーん」
ローリン「朱さん、いったん通信を打ち切ります。

毎日この時間にこの周波数で連絡を取り合いましょう」

朱「はい、わかりました。よろしくお願いします」

通信士に通信をカットする合図を送る

ローリン。

シングルトン市長「会議室へ移って討議しましょう」

○市議会議場

市長、保安官、危機管理官、大学学長、市議会議長、それに鉄男が円卓を囲んでいる。

シングルトン市長「たいへんな事になりました。

ローリンさん、今東キャナルは２７０人の移民を受け入れられるのですか？」

ローリン「マーズ号の就航を前提に住宅建設を進めてきて、現在２００戸近くの家が用意されていますし、食糧生産も順調ですか

ら、受け入れることは可能です」

ダニエル・アルメンダリス（５６）東キャナル大学学長　「しかし・・・・」

シングルトン「しかし、何ですか？　」

アルメンダリス「ここ東キャナルの住民は移民適性審査を受け、その温和な性格は、今も子供にまで深く浸透しています。武力による争いを持ち込まない、作らないという平和理念が学校でも最重要項目として教えられています。

だが、中国はそのテストに反対して、一人も移住に加わらせなかった経緯（いきさつ）があります。

はたして彼らを無条件に受け入れていいものでしょうか」

シングルトン「でも、救助要請をこのまま無視することは・・・」

アルメンダリス「そう、そうですね」

会場に重苦しい空気が漂う。

クリスティン・コートニー（４３　市議会議

長）「どうでしょう。
移民という形ではなく、西カンドールに彼らを留め置いて、そこで支援物資を提供するというのは」
ホール保安官「しかし、それでは彼らの近親結婚の問題は解決しません」
コートニー「そう、そうですね」
アルメンダリス「あの、この問題を一気にかたずけるのではなく、少しずつ計画的に対処するのはどうでしょう」
シングルトン「それは具体的には？」
アルメンダリス「彼らが受け入れるかどうかという疑問は残りますが、彼ら全員にあの移民適性審査を実施して、その合格者のみ東キャナルに受け入れるというのはどうでしょう」
コートニー「うん、それはいい考えだ。だけど・・・。もし親子の間で当否が分かれた時には、家族を分断することにはなりませんか？」

アルメンダリス「ああ、そうか。
それでは火種を残すことになる。
難しい問題ですね」
鉄男「あの、若輩の私が差し出がましいですが、一度朱という人に逢ってみて、西カンドールの様子も視察してから考えてはと思いますが・・・」
シングルトン「そうですね。
急いて結論を出すと碌なことはないから。
そうしましょう」
コートニー「でも、どうやって西カンドールまで行くのですか？」
シングルトン「それは、この岡田さんが連れて行ってくれます」
コートニー「どうやって？」
シングルトン「市議会には報告していませんでしたが、この岡田さんには、テレポーテーションという特殊能力があります」
コートニー「え」
シングルトン「一瞬で遠く離れたところへ移

動する超能力です」
コートニー「なんと！
ほんとうですか？　」
シングルトン「ほんとうです。
岡田さん、お願いしていいですね」
鉄男「はい」
コートニー「誰を送りますか？　」
シングルトン「まず私と・・・」
ローリン「だめです。
市長にはここに居てもらわないと」
ホール「そのとおりです。
逐一報告は上げますから。
まず私と、岡田さんとローリンだけで、様子を見てきます」
アルメンダリス「至当なところでしょうね」
市議会議長「いつ？　」
ローリン「１０人乗りドローンに積めるだけの小麦粉と、多分足りないであろう医薬品を準備します。
本当に足りないものは、明日の通信で聞い

てから」

ホール「武器はどうしますか」

ローリン「うーん。

彼らがどんな人間かわからないから、一応の準備はした方がいいですね。

たとえ相手にどんな風に思われようと」

ホール「といっても、この間のロシア人が残したカラシニコフ拳銃しかありませんけど」

ローリン「それを各人一丁ホルスターに入れて腰に備えましょう」

鉄男「私は小太刀を佩(は)きます」

シングルトン「それでいいでしょう。

では、明日この時間に集まってください。

細部を詰めますから」

〇杉田の家・居間

鉄男「遅くなりました。

大変なことが起きて、」

杉田「何が起こったのじゃ」

鉄男「以前火星に基地を作った中国人から救助要請が入りました」
杉田「なんと」
静「それで」
鉄男「救助することだけは決まりましたが、詳細は未定で、まず保安官と危機管理官と私が彼らのいるマリネリス渓谷まで様子を見に行くことになりました」
杉田「中国人なぁ・・・」
鉄男「何ですか」
杉田「５０００年近くの文明を誇りながら、各時代の王のほとんどが民衆をないがしろにして、遠い将来を見据えた国造りをしてこなかった地域じゃ。
まあ５６もの民族に分かれた国じゃから、無理もないのじゃけれど。
難しいのう」
鉄男「一筋縄ではいきませんか」
杉田「一波乱も、二波乱もありそうじゃのぅ」
鉄男「ふぅん・・・。

まあ、それはともかくも、私たちは今日はこれで失礼致します」

杉田「そう言わずと、もう少し」

鉄男「申し訳ありませぬ。

今日はこのアナベルの料理当番ですので」

アナベル「すみません。

あの、明日から毎日稽古に伺ってもよいですか」

杉田「よい、よい」

アナベル「有難うございます」

鉄男「それでは今日はこれで」

杉田「うん」

○ジョンの家の居間（夜）

ジョン「アナベル、美味しかったよ」

アナベル「そうですか。

有難うございます」

ジョン「それで、その中国の農業生産だが、

一体どんな農業をやってるんだ」

鉄男「分かりません、行ってみないと」

ジョン「そうか、分からないか。
一度私も見に行きたいが」
鉄男「ぜひ見ていただきたいのですが、安全かどうかも調べないと」
ジョン「それはそうだが・・・。
ぜひ、市長に話しておいてくれないか。
私が行く用意があると」
鉄男「ええ、そうします」

T（3日後）

○東キャナル空港
10人乗りドローンの傍に、腰にカラシニコフのホルスターを装着したローリンとホール、それから腰に小太刀を差した鉄男とジョンの姿が。
機体のドアからジェシーが身を乗り出し
ジェシー・ダグラス（36　パイロット
ステファニーの夫）「いつでも飛べますよ」

シングルトン「じゃあ気を付けて行ってらっしゃい。
常時連絡を取るのですよ」
ローリン「はい、それでは行ってきます」
3人は乗り込んで、ドアが閉じられる。
6個のプロペラが回転を始め、機体が宙に浮く。

○ドローン操縦席
ジェシー「まずバポニス山を目指します」
フロント・ウィンドウの彼方に、横に3つつ並んだ山が見えている。
ローレン「真ん中の山がバポニスだね」
ジェシー「ええ、1300mの山です」
ホール「エベレストより高いんだね」
ローレン「火星の火山活動が活発だったころの名残だな」
副操縦士の席から鉄男が指示する。
鉄男「進まなくていいから、この位置でホ

パリングしてください」
ジェシー「ＯＫ」
鉄男、ジェシーの肩に手を置いて、
精神を集中。
次の瞬間、機体はバポニスの上空に。
ジェシー「おお、いつもながらに驚かされるなあ」
鉄男「山の中腹の平らな場所に着陸して下さい」
機体は徐々に降下し、平らな岩盤の上に着地。

○バポニス山の中腹
４人が機体から降りる。
ローレン「ちょっと寒いなあ」
ジェシー「そりゃあそうですよ。ここでも標高３０００ｍあるから」
ホール「西カンドールはあのあたりだな」
鉄男「まだまだ先ですね」

○ドローン内部

再び全員がドローンに。

鉄男「ジェシー、こちらのテレポーテーションが気取(けど)られぬように、手前１０ｋｍくらいに跳びます。そこからは、なにくわぬ顔でドローンを飛行させて現地まで」

ジェシー「了解」

ドローンは浮かび上がりホバリング。そして消える。

○マリネリス渓谷上空

現れるドローン。

○ドローン内部

ローレン「合図に狼煙(のろし)が上がっているはずだが」

ホール「あっ、ほらあそこ」

と指さす。

延々と続く渓谷の南の低い場所から

煙が上がっている。

鉄男「行きましょう」

ドローンは煙の方向に進む。

２０分ほど飛行して、狼煙の立ち上る場所にたどり着く。

周囲には１０数個のドームと太陽光パネル。。

そばの山の壁にはたくさんの穴が開き、それぞれに扉がついている。

ローレン「あれは住宅だな。

まるで原始時代だ」

ジョン「いや、あれで冬や夜の寒さにも耐えられる。

合理的な住まいだ」

○中国火星基地広場

ドローンは徐々に高度を下げながら飛行。

程なく着地。

広場の周囲には人々が群がり始める。

そして、人民服に拳銃を吊るし、手に手に直剣を胸にかざした小隊が、列をなしてドローンの横までやって来て止まる。

周浩然（チョウハオラン）（47　中華人民共和国・火星基地司令官）が前へ出て号令。

周「右へ倣（なら）え」

兵たちは、顔をドローンに向ける。

ドローンのドアが開き、鉄男、ローレン、ホールとジョンが降りてくる。

周「捧げ、剣」

兵たちは一斉に剣を前方斜め上に突き出す。

3人は兵たちの儀礼の前を、周の方向に歩みだす。

周「納剣！」

兵たちは剣を鞘に収める。

ローレン「私は東キャナル市危機管理のローレン。

これは保安官のホール。

そして助手の岡田です。
彼は農業専門家のダーウェルです。
どうぞよろしく」
周「ああ、みなさん、よく来てくださいました。
私は中華人民共和国・火星基地司令官の周浩然（チョウハオラン）です。
ほとんど諦めかけていました。
誠に有難いです」
ローレン、周の手を握り、
ローレン「英語、お上手ですね」
周「火星移住の条件でした。
将来東キャナルの人々と交流する可能性を考慮して、全移住者に学習させました」
ローレン「小麦粉を積んできています。
下ろしてもらえませんか」
周「有難うございます。
おい、ドローンから小麦粉を下ろせ」
と兵士たちに命令。
すぐさま兵士たちはドローンに駆け

寄り、ユーアンが開いた貨物室からリレーで袋を下ろしにかかる。
最後に色の違う袋が１つ。
周「あれは？　」
ローレン「この間あなたがおっしゃっていた不足品の塩です」
周「おお、それはそれは」
ローレン「そしてこれが医薬品です」
と大きなスーツケースを渡す。
ローレン「あなた方のご苦労が偲ばれます。よく頑張られましたね」
周「それも今日で終わりです。皆さんと一緒に暮らせることは、無上の喜びです」
ローレン「それについてお話ししたいことがあります。どこか、ゆっくり話せる場所はありませんか」
周「はい、ではこちらへ」
と先頭に立って歩き出す。

ジョン「その前に、農業ドームを見せてもらえませんか」
ローレン「みんなで見せてもらおう」
ジョン「じゃあ一緒に」
周「はい。
おい、王靜（ワンジン）（３５）、ご案内しろ」

○農業ドームの中
王靜（ワンジン）、一行を連れて入ってくる。
麦畑だったようで。周囲に刈り残した穂が少し残っている。
ジョン、刈り残った麦穂を手に取って見入る。
ジョン「水が足りないなぁ。
灌水はどのように」
王「１０ｍ下の谷からポンプで汲み上げています」
ジョン「水の取り入れ口は？　」
王「この浄水器を通して畝ごとに細いパイプで散水しています」

ジョン「どれどれ」

と、パイプから漏れ出る水を口に含む。

ジョン「これはいけない。塩分が強すぎる。これでは十分収穫できないでしょう」

王「ええ、だんだん収量が落ちています」

ジョン「そうでしょう。ちょっと浄水器を見てみましょう」

装置に近づいて、覗き込む。

ジョン「全部中国語だなぁ。テッッオ、これわかるかい？」

鉄男「漢字だからおおよその意味はわかります。これが硫化濃度、これが塩化濃度、これが亜鉛濃度でしょう。それから・・・」

王「良くお分かりですね」

鉄男「同じ漢字を使う日本人ですから」

王「ああ、そうですか」

ジョン「やはり塩分濃度計が動いていない。
この留め金をはずすと中を見られるかな」
外して塩分計測のプラントに触る。
ジョン「濾過膜が外れている。
これでは塩辛くなるはずだ。
メンテナンスする係りは居るのかね」
王「ええっと・・・」
ジョン「指示しておいてください。
その前に田畑を正常な水で満たして、地中に溶け込んだ塩分を吸収させてから排水しないといけない」
王「わかりました。
専門の係りが1昨年亡くなって、この装置に詳しいものが居なくなりましたけど。
なんとかします」
ジョン「そうしてください。
ここの麦のドームだけじゃなくすべてのドームの脱塩をしないといけない」
装置に蓋をしてドームを出る一行。

○麦ドームの外

王と鉄男とジョン、一行から遅れてドローンの方へ歩き始める。

そのとき中年の女とその娘と思われる二人連れが、前を横切る。

王「おい、李芳（リファン）じゃないか。

梓晴（ズーチン）をどこへ連れてゆく！」

李「あっ」

王「待て、逃げるな」

と李の腕を掴みねじって顔を殴りつける。

鉄男「おい、なにをする！」

と、王の腰のベルトを掴み引き倒す。

王「邪魔をしないでくれ！」

鉄男「そうはいかない。

女を殴るとは卑怯な奴だ！」

王、起き上がり、腰の拳銃に手をかけようとする。

一瞬、鉄男の小太刀がひらめき、

ホルスターのベルトを切って落とす。

王、鉄男を睨みつけて逃げ去る。

鉄男「あなたたち、さあ逃げなさい」

李「有難うございます」

二人は鉄男に頭を下げる。

ジョン「おい、ちょっとまずいんじゃないか。

逃げたあいつ兵士だぜ」

鉄男「でも・・・」

ジョン「そうだな、女を殴るなんて許せないよな。

前をゆく連中には気づかれていない。

まあ、なんとかなるさ」

○中国火星軍・作戦室

周「さあ、どうぞお掛けください」

部屋に１０席程の椅子を指し示す。

ローリンたちはその椅子に座る。

周「お話とは何でしょう」

ローリン「あなたの国の火星基地になぜ軍隊がいるのですか？」

周「それは、わが中華人民共和国を滅ぼしたロシアのドブゾロフの攻撃に対処するためです」

ローリン「本気でロシアがここへ攻めてくると思っているのですか？

陳国家主席はもう、ドブゾロフに暗殺されて、この世にはいないんですよ 」

周「それはフェイクです」

ローリン「地球との通信が途絶えていますね。

本国と連絡が取れていないでしょう。

だから、地球からの援助はもう期待できませんよ」

周「それもフェイクです。

主席様は今も生きておられます。

そして、近々、この火星基地に援助物資と追加の移住者を届けてくれるはずです」

ローリン「ロシアが我々の火星移民船マーズ号を占拠して火星を攻撃しようとして失敗しました。

彼らには何千兆ドルもの宇宙船を建造する力はありません。
それができる移民船マーズ号は２隻ともこの火星に留め置かれています。
軍隊など無用の長物としか思えません」
周「それは立場の違いでしょう。
あなたたちには我々の気持ちが分かりません」
ローレン「ところで、あなた方は、東キャナルに移民したいのですか？　」
周「そうです。
ここは生活に適した場所ではありませんでした。
移住してみて初めてわかりました。
ぜひお願いしたいと思っております」
ローレン「それには条件が２つあります。
一つは、１３歳以上の人たちに我々の移民適性審査を受けていただくことです」
周「それはなんですか」
ローレン「狭い火星で、みんな和やかに生

活できるかどうかの判定に使います」

周「人間がそんなテストで簡単に振り分けられると思っているのですか」

ローレン「少なくとも東キャナルではそれが成功しています。

最高の学者たちと、最高度のＡＩによって作られた審査です。

２００００人の生活する中で、権力抗争や、宗教紛争などは１件も発生していません。

さすがに、男女の恋のもつれからの殺人事件は昨年３件発生しましたが、これは想定内の数字です。

今現在、アメリカの１０万人当たりの殺人件数は年４５０件です。

人口比で行くと、２００００人の東キャナルだと９０件に相当します。

いかに東キャナルが平和かこれでお分かりでしょう。

我々が平和に暮らしていくためにはこの

テストは重要です」

周「・・・・、少し考えさせてください」

ローリン「もうひとつの条件は、軍隊の解散です」

周「なんと！　」

ローリン「東キャナルには、軍人は一人もいません。

保安官の下、保安官助手が３５人いて、平和の確保に努めています。

主に事故対応がほとんどですがそれで十分なのです」

周「・・・・」

ローリン「これは即答ができるものではないでしょうから、後日伺ったときにご返事ください。

今日はこれで失礼します。

何か質問はおありですか？　」

周「いや」

○中国火星基地広場（夕方）

ドローンに乗り込む４人。
中国人の群衆の見守る中、ドローンは空高く舞い上がり西の方向へ。

〇ドローンの中（夕方）
ホール「連中の返事はどうなるでしょうね」
ローレン「いやあ、あの最後の周の顔つきからして、とても受け入れられそうにありません。
これからの対応を考えておかないと」
ジェシー「お話の途中でなんですが・・・」
ホール「なんだね」
ジェシー「あの、密航者がいます、二人」
ホール「えっ？　なんと？　」
ジェシー「二人とも出てきて」
その声を合図に、奥の休憩室から二人の女性が現れる。
鉄男「あっ、あなた達は！　」
ジェシー「みんなに挨拶して」
年上の女が、みごとな英語で

李芳（リファン）「リ・ファン（２７）と言います」
朱梓晴（チュズーチン）「チュ・ズーチン（１３）です」
ローリン「一体なにがどうなっているのか」
ジェシー「皆さんが会談に向かって、群衆も散り散りになったとき、ドローンのドアが開けられて、３人の中国人が乗り込んできました。

（回想）
○ドローンの中。
突然、男一人と女二人が乗り込んできて、すぐにドアが閉じられる。
朱星宇（チュ・シンユー）「チュ・シンユーと申します。突然押しかけて申し訳ありません。この、妻の李芳（リファン）と娘の朱梓晴（チュズーチン）を一緒に連れて行ってもらいたいのです。このままだと、二人がひどい目に合うのです」
ジェシー「連れて行くと言っても・・・」
朱「詳しくは妻から聞いてください。だれが見張っているか分かりませんから、

私はこれで」

と言うが早いか、ドアを開けて外へ。

戸惑うジェシー。

ジェシー「話を聞けと言われても・・・」

李芳（リファン）「ほんとに驚かせてごめんなさい。こうでもしないとこの娘が・・・」

ジェシー「あの、最初からきちんと説明してください」

李芳（リファン）「はい、わかりました。

実は私は中国火星基地司令官・周浩然（チョウハオラン）の妻でした。

連れ添って7年たっても私が妊娠しないので、毎日（産まず女（め））と呼ばれ、この間（あなたに子種がないのでしょう）と言ったら、殴る蹴るの乱暴。

そして挙句の果てに、奥さんが亡くなった軍の副官朱に、私を娶（めとれ）れと。

何をするかわからない人なので、朱もおとなしく私と結婚。

それから周は、朱の亡くなった奥さんとの

間に生まれたこの娘朱梓晴（チュズーチン）を自分の妻にすると言い出して・・・・」

ジェシー「だって、その娘さん、まだ子供じゃないですか」

李芳（リファン）「まだ１３歳です。

今日までいろいろ理由を付けて引き延ばしてきましたが、ちょうど今日あなた方がいらっしゃったのを幸いと、・・・・」

ジェシー「そうか、そうなんですか。

それならどうぞ・・・・と言いたいところですけど、私はバイロットの身分、みんなが帰ってきたら話してみます。

それまで、奥の休憩室で待っていてください」

李芳（リファン）「はい、ありがとうございます」

朱梓晴（チュズーチン）「ありがとうございます」

（回想終わり）

○ドローンの内部

ローリン「そんなことがあったんですか。あの周だとやりかねないな」

ホール「でも、このまま連れ帰ると、周との交渉が難しくなるのでは・・・」

ローリン「なにを聞かれても知らぬ存ぜぬで押し通せばいい。このまま二人を帰すわけにはいかない」

ホール「そうですね。そうしましょう」

李芳（リファン）「あの・・・」

ローリン「なんですか」

李芳（リファン）「このことは主人から言づけられたのですが・・・。じつは夫の朱は、フリー・チャイナの指導者なんです」

ローリン「えっ？フリー・チャイナってなんですか」

ホワン「周の率いる旧態依然の中国の政治体制に反旗を翻す一団です。自由にものが言える民主主義に舵を切ろう

としています。
夫もあまりに横暴な周に我慢が出来ず、フリー・チャイナを立ち上げました。
こっそり参加者を募ったところ、なんとおおよそ１４０人の大人の男女の中国人が参加しました。
周に真に忠誠を誓うのはおおよそ１０人。
でも、その者たちも、何らかのフリーチャイナとの血縁があり、実力行使にためらっていました。
ちょうど東キャナルの人たちと連絡ができて、ここが決起の時と」
ホール「これはえらいことを聞いてしまった。
ローレン、どうします？　」
ローレン「うーん。
これは市長・市議会に報告しないと。
とにかく帰りましょう」
鉄男「じゃ、東キャナルへ跳びます。
いいですか」
ホール「そうしよう」

鉄男「李芳（リファン）さん、朱梓晴（チュズーチン）さん。
席のベルトを締めてください」
全員席に着くと、鉄男は前方のバポニス山とオリンポス山を睨んで・・・

○東キャナル・中央病院屋上
突然、病院の上空にドローンが出現。
ジェシーはゆっくり機体を下ろす。
着陸してエンジンを切る。
ローリン「さあ、行きましょう」
李芳（リファン）と朱梓晴（チュズーチン）を促す。

○中央病院受付
ローリン、鉄男、李芳（リファン）、朱梓晴（チュズーチン）が受付へ。
病院の院長がやってくる。
ジャーナ・ムベキ（５６　中央病院院長）
「一体何事ですか」
ローリン「すまないが、この二人のご婦人を隔離病棟へ移して検疫を。

中国火星基地から連れてきました。
（李芳（リファン）と朱梓晴（チュズーチン）に）必要最小限の東キヤナルの防疫措置です。
ご理解ください」
二人頷く。

○市長室

市長とローリン、ホール、アルメンダリス、市議会議長コートニーと鉄男が同席。

シングルトン「そうですか、軍隊をね」
ローリン「ええ、初め見たときは目を疑いました。
私たちの市も、すべての産業に人手が足りていないのに、たった２７０人で軍隊とは。
食糧不足も当然です」
シングルトン「どうしたものでしょうね」
ホール「やはり、軍の解体が必要条件でしょうね。
その上で、やはり移住適格審査を」

アルメンダリス「審査から外れた人は？　」
ローリン「西カンドールに留め置いて、あの軍事優先の洗脳を、根気よく解いてゆくのでしょうなぁ。
その間食糧援助を」
シングルトン「ふーん。
頭の痛いことです。
それで、スケジュールは？　」
ローリン「周と連絡を取って、来週中には再度、西カンドールへ行くつもりです。
それでどうでしょう」
コートニー「これは市議会に諮らねばなりません。
相談も無しにこのような重大案件を実施することはできません」
シングルトン「そうですね。
じゃ早速明日召集を懸けましょう」

○杉田の家・外観

○杉田家の居間

杉田夫婦と鉄男とアナベルがお茶を飲んでいる。

杉田「さようか。そのようなことがあったのか」

鉄男「相手がどのような武器を持っているのかわかりません。もし核爆弾を抱え込んでいたら・・」

杉田「まさかそこまで愚かではなかろうが」

鉄男「さあ、どうでしょうか」

アナベル「あの、話の途中すみません。岡田さん、先生とも話したのですが、私はここに住み込みで修業したいと思います。いいですか」

鉄男「えっ、それは・・・」

杉田「そのほうがこの人にとっても良いと思うがどうだろう」

鉄男「それでは殿に多大な負担をかけることになります」

静「負担と言っても基本的な衣食住は、こ

こ火星では配給制ですから、なにも困りませんよ」

アナベル「先生お二人のお手伝いをしますから」

鉄男「そうですか。

そこまでの熱意があるのなら・・・」

杉田「さあ、今宵は心行くまで飲み明かそうぞ」

鉄男「はあ」

杉田「はあではない、はいと言え」

鉄男「はい」

（一週間後）

○東キャナル空港

１０人乗りドローンが離陸準備。

○ドローン内部

鉄男「おっ、ユーアン！」

ユーアン・フラナリー（３０　パイロット）

「お久しぶりです」

鉄男「今日はあなたの操縦ですか」
ユーアン「はい」
鉄男「ジェシーはどうしたのですか」
ユーアン「おとといから風邪をひいて休んでいます」
鉄男「おお、そうですか。
それは心配だ。
ユーアン、今回は危険な飛行になりそうですが、大丈夫ですか」
ユーアン「ええ。
前回の飛行の詳細はジェシーから聞いてますから」
鉄男「向こうに着いてからどんなことになるか分かりません」
ユーアン「心配しないでください」
鉄男「わかりました。
ちょっとジェシーに電話してきます」
ドローンの後方へ移動し、携帯をとりだす。
鉄男「もしもし」

キャリー（4　ステフの娘）「もしもし」
鉄男「もしもし」
キャリー「もしもし」
鉄男「これじゃ埒が明かないな。
もしかして、キャリー？」
キャリー「そうだよ」
鉄男「テッツオだよ、わかる？」
キャリー「ダディ！」
鉄男「そうだ、ダディだ。
元気？」
キャリー「元気だよ」
鉄男「そう、ジェシーはそこにいるかい」
キャリー「いるよ」
ジェシー「テッツオ！。
なんだい急に」
鉄男「ユーアンから、君が風邪だと聞いて」
ジェシー「ああ、ありがとう。
もうほとんどよくなったよ」
鉄男「それはよかった」
ステフ「テッツオ、あなたなの？」

鉄男「ああ、君か、元気かい」
ステフ「元気よ。
たまにはキャリーに逢いに来なさいよ」
鉄男「そうだね。
この仕事が済んだら」
ステフ「まだあのアナベルと暮らしている
の？　」
鉄男「ああ、彼女は剣道の先生のところで暮
らしている」
ステフ「そう、それはよかった」
鉄男「さあ、どうかな」
ステフ「あなた、あの人に惚れているの？　」
鉄男「いや、そうじゃない。
だいたい彼女の心の弱みにつけこんで、ナ
ニに及ぶというのは、まともな男のするこ
とじゃない。
私は彼女の保護者なんだ」
ステフ「ごめんね。
下品なことを言って」
ホールやローレンが乗り組んでくる。

鉄男「いや、気にしないでいい。
ああ、もう出発だ。
またね」
キャリー「ダディ、また遊ぼ」
鉄男「うん、じゃあね」
ユーアン「出発します」

○東キャナル空港
ドローンがゆっくりと離陸。
しばらく上空でホバリングしてから
フッと消える。

○西カンドール中国基地
１０ｋｍ手前から飛行してきたドローンが着陸。
ドアが開いて、３人が降りてくる。
朱「やあ、いらっしゃい。
私が朱星宇です」
ローレン「ああ、あなたが朱さん。
奥様から詳細は伺いました」

朱「しっ、そのことは内密に。
じゃ、さっそく」
と、先頭に立って歩き始める。
兵士たちもついて来る。

○中国火星軍・作戦室
右側の席にローレン、ホール、鉄男。
左側の席に周と朱。
周りに兵士たちがそれぞれ３人、後ろに立っている。

朱「お話を始める前に質問があります。
質問というのは、先日皆さんが来られた後、私の妻と娘が行方不明になりました。
このことについて、なにかご存じでは？　」
ローレン「なんのことをおっしゃっているのか分かりません。
そのことと今日の会談に関係があるのですか？　」
朱「いや、失礼。
もしかしたら何かご存じではと思ってのこ

とです。

では周司令官どうぞ」

周「では、先日の移民適性検査についてですが、検査に引っかかった者はどうなるのですか？」

ローレン「こちらの案としては、その方々は、ここに留め置いて、適正なレベルになるまで教育させていただきます」

周「これはまた異なこと。

それは洗脳ではありませんか。

自由を標榜するあなた方とも思えません」

ローレン「他人に害を加える可能性のある人を正しい方向に導くことは、洗脳ではありません。

地球の刑務所でもこれは行われてきました。

これは人類がここ火星で争いなく生き延びるためには、必要最小限の人権の制限です」

周「とても受け入れられません。

それと軍の解体は絶対拒否します。
それは我々が寄って立つ安全秩序の破壊につながります」
ローレン「前もお話しした通り、我が東キャナルでは、１００年近く軍隊無しでやってきました。
その間なんの不都合もありませんでした。
それとも私たちの提案をお断りになって、破滅の道をお選びになるのですか」
周「いずれ陳国家主席様が、救援の船団をお送りになるはずだから」
ローレン「その主席がどのように暗殺されたかご存じですか」
周「そんな話は聞きたくない」
ローレン「あなたの国は２００年近く、国民を信じず、いつか反乱を起こすことを恐れて、信じられないくらいの数の監視カメラで、全国民を見張っていました。
そのシステムがロシアのハッカーによって乗っ取られ、政治家１００人、軍人１００

人の所在を掴み、その住まいに近接した位置から超小型ドローンで狙い撃ちにしました。

こうして中国人民共和国は無くなったのです」

周「だまれ、だまれ」

しばらく両者はにらみ合い、口を閉じていた。

周「致し方ない。

おい、かかれ」

と兵士たちに命令。

ローレンたちの背後にいた3人の兵士がホルスターからテーザー銃を抜き、発射。

3人は電圧にしびれて椅子の上で失神。

周「おい、縛っておけ」

言い放つと席を立つ。

○ドローン内部

操縦席のユーアン、計器のチェックに

余念がない。

そこへ一人の兵士が入ってくる。

王靜（ワンジン）「うわあ、これは・・」

ユーアン「操縦パネルを見たことないですか」

王「いえ、ここにも2人乗りのドローンはありますが、こんなにすごいのは初めて見ました。

スターターはこれですか」

ユーアン「そうです」

王「このレバーで前進・旋回をするのですね。

上昇・下降は？　」

ユーアン「この足元のペダルで」

王「これは同じだ。

燃料計は？　」

ユーアン「これです」

王「ほぼ満タンじゃないですか。

余程性能がいいんですね」

ユーアン「ええ、まあそうですね」

兵士「判りました。

さあ、立って！」

ユーアン「ええ！」

兵士「外へ出るんだ」

その手には拳銃が。

○中国火星軍・作戦室

ドアが開いて、拳銃を突き付けられたユーアンが入ってくる。

王「おい、こいつも椅子に縛っておけ」

ほかの兵士がユーアンに縄を。

鉄男たちはまだ失神状態。

○１０人乗りドローンのそば

周「おい、乗り込め！」

１０人の兵士たちが乗り込む。

周「おい、朱、後のことは頼んだぞ。わしは東キャナルを偵察してくる。着いたら燃料を補給してドローンを帰すから、次の１０人を送ってくれ」

朱「わかりました」

周「頼んだぞ」

周が乗り込んですぐドローンは

発進。

複雑な表情で朱はドローンを見送る。

○中国火星軍・作戦室

鉄男が目覚める。

混乱する意識の中でまわりを見回す。

ユーアン「あっ、テッッオ！　」

鉄男「ええ？

なぜ君がここに」

ユーアン「中国兵に拉致された」

鉄男「なんだって！　」

ようやくローリンとホールが目覚める。

ローリン「ここまで乱暴な手段を取るとは」

ホール、不快さに呻く。

そのとき、二人の兵士を伴って朱が

入ってくる。

朱「おい、縄を解いて差し上げろ」

ローレンと鉄男は顔を見合わせる。

二人の兵士が手分けして縄を解く。

朱「妻からお聞き及びの事と思いますが、私がフリーチャイナの朱です。お助けするのが遅れてすみませんでした。反乱の機会をうかがっていましたが、今が絶好のチャンスです。お手助け願えませんか」

ローレン「そうですか。周は？」

朱「東キャナル攻撃に出発しました」

ローレン「なんですって！何に乗って？」

朱「あなたがたのドローンです」

笑い出してしまうローレン。ほかの3人も苦笑いを。

朱「何が可笑しいのですか」

ローレン「あのドローンは最大航続距離が150km、片道75kmです。とても東キャナルには行きつけません」

朱「でも、あなたがたは・・・」

ローレン「秘密の方法があるのです。
それはともかくも、あなたがたこれからどうなさるのですか」
朱「刈り取りを終わった麦畑に、住民全員を集めました。
これから反乱を公開して、同意を求めます。
皆さんもご同席願えませんか」
ローレン「ほう、そうですか。
それならぜひ」
朱「参りましょう」

○中国火星基地。小麦ドーム
ドームに大人から子供まで、それぞれ刈り取りの終わった小麦畑に座って、集まっている。
朱が手にした拡声器を口元へ。
朱「こんにちは。
私は、中国火星軍副司令官の朱です。
副司令官は、たった今辞任します。
そして自由を求めるフリー・チャイナの代

表に就任します。
こちらのみなさんは、私たちを助けるために東キャナルから来られた方々です。
司令官周は、武力で皆さんを押さえつけ、勝手気ままに基地運営を続けてきました。
例えていえば、彼の女遊びです。
結婚していようがいまいが、気に入った女を妻にして、飽きれば放り出し、次の女に乗り換える、そんな無法を続けてきました。
最近、私は彼の妻を押し付けられ、かわりに１３歳の娘を差し出せと命令されました。
今まで我慢してきたのが、そこで堪忍袋の緒が切れました。
そこから秘密裏にフリー・チャイナを立ち上げ、周討伐の機会をうかがってきましたが、今日ここにそのチャンスが訪れました。
周はこの人たちの乗ってきたドローンで東キャナルを討ちに出発して今ここにいません。

千載一遇のチャンスです。
みなさんにフリーチャイナに参加してもらいたいと思います。
あくまでも周に忠義を尽くそうとお考えの方は、今すぐこのドームから出てください。
結婚なさっている方は、ご夫婦で相談してください。
今から１０分時間を差し上げます」
会場はザワザワとし始める。
すぐにドームから出てゆく家族が３組。
しばらくして、１組また１組。
結局１０分が過ぎたとき、出て行ったのは５組。
朱「思ったより多くの賛同が得られました。
この後自宅へお帰り下さい。
今後のことについてはラジオでお知らせします」

○１０人乗りドローンの内部

パイロットの王、操縦盤に目を見開いている。

王「これは！　」

周「どうした」

王「訳が分かりません」

周「何が」

王「これを見てください」

と燃料計を指し示す。

王「まだ１２０ｋｍしか飛んでいないのに、燃料がほぼ無くなりました」

周「そんな馬鹿なことがあるか。東キャナルまでは３０００ｋｍあると聞いたぞ」

王「でも」

周「メーターが狂ってるんだろ」

王「０．０１の位まで正常に動いています」

周「このまま飛び続けたらどうなる」

王「墜落するか、不時着するか」

周「うーん・・・」

機内の雰囲気は張り詰める。

周「よし、近くに着陸しろ」

○チトニウム・カズマの北西の岩盤

ドローンが舞い降りる。

○ドローンの内部

周が腕組みをして計器を睨んでいる。

周「なぜあいつらは、この燃料で３０００ｋｍを飛べたのか」

しばらく考え込む周。

そして

周「銃と弾薬、水と食料を持って降りろ。基地まで歩いて帰る」

王「１３０ｋｍもありますよ。この装備なら、５日以上かかる」

周「仕方ないだろ。誰も助けてはくれない」

○チトニウム・カズマの北西の岩盤

ドローンから１２人の男たちが降りてくる。
背中には大きな背嚢と、腕には自動小銃。
周は自動小銃のみで、先頭を歩き始める。
右下は１８００ｍほどの崖。
黙々と歩く一団。

○西カンドール・中国基地（夜）
ローレン「さて、周たちはどこまで飛んだだろう」
鉄男「私が小刻みにテレポートして、彼らを捜しに行ってきます」
ローレン「今日はもう暗いから明日に」
ホール「そうだな。
その方がいい」

○西カンドール・中国基地（朝）
鉄男「じゃあ、行ってきます。

ユーアン、君も来てくれるかい」
ユーアン「ええっ、どうやって？　」
鉄男「こうするのさ」
鉄男、ユーアンの腰のベルトを掴んで消える。
ローレン「東キャナルに連絡して移民適合審査の入ったタブレットを人数分用意してもらおう、
多分小学校から借りることになる」」
○西カンドール・カズマの西１００ｋｍ
鉄男とユーアン地面に降り立つ。
ユーアン「ああっ、びっくりした」
鉄男、周りをゆっくり見回す。
鉄男「このあたりにはいないな。
あの山まで行こう。
大丈夫か？　」
ユーアン「跳ぶときには言ってくれよ」
鉄男「わかった。
じゃ跳ぶよ」

二人消える。
こうして何回か跳躍して、ついにチタニウム・カズマへ。

○チタニウム・カズマの岩盤
乗り棄てられたドローンの横に二人は現れる。

鉄男「乗ってみよう」

○ドローン操縦席
二人は操縦席に座る。

ユーアン「もうほとんど水素燃料がない」

鉄男「一度西カンドールまで戻ろう」

ユーアン「そうだな」

鉄男「残りの燃料で上空でホバリングして」

ユーアン「よし」

ドローンは上空１ｋｍまで上昇。
そして消える。

○西カンドール中国軍基地

突然現れるドローン。
ユーアンと鉄男降りてくる。
やってきたローリンとホールと朱。
ホール「ドローンには君たちだけか」
鉄男「はい。
周たちは歩いてここへ帰って来るようです」
ローレン「どう見積もっても、4日かかるな。
ともかく、いったん東キャナルへ帰ろう。
朱さん、ドローンに燃料を補充しに帰ってきます。
それまでに移住適性審査の準備をしてください。
審査用のタブレットを持ってきますから」
朱「はい、わかりました
○東キャナル宇宙空港
整備棟近くの上空にドローンが現れる。
ドローンはゆっくり地面に。
整備士の一団が駆け寄ってくる。
地面に降りたユーアン。

ユーアン「おい、君たち、水素ボンベを、
全部新しいものに換えてくれ」

○ドローン内部

鉄男、通信機のスイッチを入れる。

鉄男「もしもし、通信指令室？　」

通信士「どなたですか」

鉄男「岡田です。
市長に繋いでください」

通信士「はい、しばらくお待ちを」

5分ほどして

シングルトン市長「岡田さん」

鉄男「ローレンから連絡いってませんか」

シングルトン「ええ、さっき連絡してきたわ。
危ない目に合ったのね」

鉄男「ええ、そうなんですけど」

シングルトン「今、どこに居るの？　」

西カンドールじゃないの？　」

鉄男「色々ありまして、今東キャナル空港で
ドローンの燃料補充中です」

シングルトン「まあ、そうなの。
今、西カンドールから朱さんの連絡が入っているの。
あなたと話したいって。
切り替えるわね」
朱「もしもし、岡田さんですか」
鉄男「はい、そうです」
朱「ローレンさんからあなたの超能力のことを聞きました。
それでお願いがあるのですけど」
鉄男「なんでしょう」
朱「実は、周についていった兵士の事なんですけど」
鉄男「ええ」
朱「彼らを助けたいんです」
鉄男「どういうことですか」
朱「彼らの中には、東キャナルの攻撃には乗り気でない者もいるんです。
まして火星の高地の夜は、夏でも零下に気温が下がります。

装備の中に防寒服は無いので、凍えてしまいます。
彼らの中には、我々の遠い親戚の者もいて、なんとか助けてやりたいんです。
どうでしょう」
鉄男「優しいんですね、あなた方は。
いいでしょう。
ドローンの準備が整ったら、そちらへ帰ります」
朱「そうですか、助かります。
それじゃお待ちしています」

○西カンドール・カズマ・中国基地
到着したドローンから降りる鉄男。
すでに朱が待ち構えている。
朱「どうも有難うございます」
鉄男「お礼をおっしゃるのは早すぎます。
早速捜しに行きましょう」
そこへローリンとホールがやってくる。
ローリン「移住適性審査の入ったタブレット

は持ってきましたか」

鉄男「ええ、じゃ、早速下ろしましょう」

朱の指示で、兵士たちが荷物を下ろしにかかる。

1時間後

朱「岡田さん、じゃお願いします」

鉄男「じゃ、行きましょう」

朱、ユーアンとともにドローンに乗り組む鉄男。

ドローンは高く舞い上がり、西の方向へ。

そしてテレポート。

朱「こ、これがテレポーテーション」

○チタニウム・カズマの丘

○ドローン内部

鉄男「ユーアン、ここで待っていてくれ。兵士たちを捜してくるから」

ユーアン「分かった」

鉄男「じゃ、朱さん」

○チタニウム・カズマの丘

ドローンから降りた二人。

二人とも防寒服を着ている。

鉄男「周たちが行くとすれば、どの方向でしょう」

朱「東キャナルまでは大変な距離があるから、まず西カンドールを目指すでしょう」

鉄男「じゃ東の方ですね」

朱「多分、この尾根伝いに移動したのでしょう」

といって地面を調べ始める。

朱「うん、足跡がある」

と、指で足跡を辿る。

朱「あの尾根の先まで続いている」

鉄男「じゃあそこまで」

と、朱の腕を取ってテレポート。

○尾根の頂上

突然現れる二人。

朱、またも足跡を捜す。

朱「ここから尾根を下っています。
行く先は・・・」

と、次の場所を探す。

朱「あそこあたりだ」

鉄男「行きましょう」

○ドローンから２０ｋｍの窪地

現れた二人、周囲を調べる。

朱「ここに乾パンの袋が。
ここで野営したのでしょう」

鉄男「彼らは一日どのくらい行軍したのでしょう」

朱「演習では一日最大３０ｋｍ。
しかし慣れない高地の行軍で彼らも疲れているはずです。
そんなには歩けません」

鉄男「ここで一泊。
そして翌朝は・・・」

朱、少し先の地面を見る。

朱「ここから出発ですね、この方向へ」

○第一宿営地から２０ｋｍの洞穴の前

朱「寒さしのぎでここに宿営したのでしょう。あっ、水筒が捨ててある。水を飲み切ったんだな」

鉄男「水なしでどのくらい行軍できるのでしょう」

朱「いやあ、多分３日が限度でしょう。地球とは違いますから」

鉄男「なぜこんな無謀な」

朱「周はもともと軍人ではなく、軍の会計をやっていましたから、兵站（へいたん）のことなどまったく分かっていないはず」

と、そのとき洞窟の奥で人のうめき声が。

億へ駆け付ける二人。

○チタニウム・カズマの丘

洞窟に二人が消えたころ、周と王が

こっそりドローンに近づき、貨物室のドアを音もなく開いて中に入り、ドアを閉める。

○洞窟の中

アルミの寝袋の中で一人の兵士が、青い顔をして横たわっていた。

朱「おい、張（チャン）（４４）しっかりしろ！　」

張「ああ、副司令官殿」

ガタガタ震えながら答える張。

朱「お前だけが置き去りか」

張「いいえ、その奥に何人か」

鉄男が奥へ走ってゆくと、そこには６人の男たちが倒れている。

朱、走って来て、男たちの脈をとる。

朱「なんとか生きている。岡田さん、とりあえずこの男たちをドローンへ」

鉄男「はい。

ドローンで西カンドールまで運びましょう」

○西カンドール・カズマ中国基地

ドローンから男たちを下ろす看護師たち。

朱「なんとか助けてやってくれ」

朱と鉄男は再びドローンへ。

そのとき、ドローンの反対側の貨物室ドアが開いて、自動小銃を構えた周と王がこっそりと降りてくる。

そして小走りに着陸場から走り去る。

○中国軍・武器庫

周と王は扉を開けて中へ。

そこには周派の兵士５人がいた。

黄李（フウアンリ）（３９）「司令官殿！」

周「どうした、何があった」

黄（フウアン）「朱がクーデターを」

周「畜生！

あの朱の野郎、ずいぶん取り立ててやったのに裏切るとは！

よし、見ておれ。

みんな、ここへ集まってくれ」

7人は集まる。

○西カンドール・カズマ中国基地

○洞窟の住宅

簡易ベッドに横たわり手当てを受ける7人の兵士たち。

まわりには兵士たちの家族。

朱「3人の兵士が崖から滑落したそうだ。あの高さでは助からない。それにしても周と王は行方が分からない」

鉄男「いったいどこに」

○中国基地・小麦栽培ドーム（朝）

刈り取りの終わった田に大勢の中国人が座っている。

手に手にタブレットを。

朱「今皆さんが手にしているものは、東キャナルからお借りしてきたタブレットです。13歳以上の大人のための移住適性審査を

行います。
詳しくはローレンさんにご説明頂きます」
ローレン「このテストは、これによって皆さんの人間性のすべてを判断するものではありません。
万一審査に通らなかったからと言って、皆さんがだめな人間と言う訳でもありません。
ただ、地球ではいまだに戦争が途切れなく続いています。
そのほとんどが、人類の未来などお構いなしに、声の大きい指導者の意のままに、破滅の道へと突き進んでいます。
この審査はそのような声の大きい指導者をはじいて、平和な火星世界を実現するためのものです。
この審査に通ったからと言って、未来永劫、火星に戦争が起こらない訳でもありません。
でも、やはり、そのような危険な状況を作り出さないため、私たちは不断の努力を重

ねなければなりません。

そこをご理解いただいて審査に臨んでいただきたいと思います。

まず、左下のＯＮ／ＯＦスイッチを押してください。

それから言語の選択画面になります。

皆さんは全員英語が話せるとお聞きしていますから、英語を選んでください。

勿論中国語でもかまいません。

そして氏名・年齢・家族構成を音声入力します。

すると、「審査を始めます」と表示されます。

そうして１問ずつ質問が現れます。

それに「はい、いいえ、わからない」の回答に指でタッチして回答します。

回答は１問につき１分以内にお願いします。

前の問題に戻ることはできません。

カンニングをした方は、東キャナルへの移住が永遠に拒否されます。

こうして６０分６０問の審査が終わると、

５分間の休みがあります。
２時間終わると、いったんお家へ帰って、昼食をお取りください。
午後１時から、３時間の審査が始まります。
こうして５時間３００問の審査が終わると、すぐに、タブレットに審査の合格・不合格の結果標示が出ます。
その集計は、この私の前のコンピュータにも標示されます。
合格した方は、得意なお仕事を登録してもらいます。
それによって東キャナルでのお仕事が割り振られます。
タブレットに「合格しました」の表示の出た方は、タブレットをここに提出してお帰り下さい。
準備の整ったときに、１０人ずつ東キャナルへ移動します。
東キャナルには、皆さんご家族の家が用意されていますから、そこから皆さんの新し

い生活が始まります。

不合格の表示が出た方は、東キャナルからの心療医師によって、ここ西カンドールで平和教育を受けていただきます。

そこで、社会の平和を乱さないと判断された方から、東キャナルへ移動します。

そこで別れたご家族がいらっしゃったら、一緒に生活していただきます。

それでも社会に有害と判断された方は、ここ西カンドールでずっと生活していただきます。

残酷なようですが、数少ない人類の生き残りを懸けた戦いとご承知ください。

なにか質問は？　」

ある主婦「東キャナルの生活必需品は？　」

ローレン「衣食住は配給制で、食べるに事欠くことはありません。

そのほか、電気、上下水道料金も無料です。

よりよい生活をお望みの方は、市の審査が通れば、起業して、デジタル通貨を稼ぐこ

とができます」

ある主婦「どこに住むのですか」

ローレン「仕事場に近いところの住宅に入ってもらいます。

だから、中国人ばかりの地区というのはありません。

ただ心細いでしょうから、少人数のグループが一緒に住めるようにはします。

時間も限られていますので、始めます」

一斉にタブレットに指を走らせる人々。

○中国軍・作戦指令室

朱「皆さんほんとうに有難うございました。みんなの顔に笑いが戻ってきました。

１３歳以上の大人で審査を通過したのは１６３人。

子供を加えると２４７人が移住できます。

ほとんど全員が審査を通過しました。

ただただ感謝するばかりです」

ローレン「さあこれからが本番です。幼い子供や妊婦、老人のいる家族が優先的に移住開始します。持ち物は最小限にしてください。食品・衣類は持ち込めません。検疫に手間取るからです。着ているものはすべて向こうで焼却され、新しい衣類が支給されます。そのことを周知してください」

朱「わかりました。じゃ、さっそく人選を始めます」

〇西カンドール・中国基地広場

たくさんの人たちが出入りしている。

朱「最初の移民団の出発です。こんなにうれしいことはない」

ローレン「おめでとう。あなたはここ数日寝ていないでしょう」

朱「いや、興奮して横になっても寝られませ

ん。

移住が終わったらゆっくり休みます」

ローレン「ところで移住を拒んだ５組の兵士たちはどうしていますか」

朱「武器庫に籠って出てきません。あそこには武器弾薬のほか、食糧貯蔵庫でもあり、水も電気も通っていますから、不便はありません」

ローレン「それにしてもずっと立てこもれるはずもないですから・・・」

朱「部下が、周囲を交代で監視していますから、なにかあったら連絡が入ります。あっ、飛び立った！」

３組１２人を乗せたドローンが上空へ。

○ドローン内部

操縦席にジェシー、副操縦席に鉄男。

後部の座席には、３組の夫婦と、その子供たちが。

３歳くらいの子供たちがはしゃぎながら窓の外を見ている。

ジェシー「にぎやかだなぁ。なんで子供たちはこんなに元気なんだろう」

鉄男「ドローンに乗るのは初めてだから。少しの間、テレポートしないで遊覧飛行を楽しませようよ」

ジェシー「そうだな」

こうしてドローンは西カンドールを離れてゆく。

○東キャナル運動競技場

ドローンが突然現れて、競技場中央に着陸。

鉄男「さあ、皆さん、降りてここで検疫を受けてもらいます。

３日間ここで泊まります。

競技場の中ならどこへ行ってもかまいませんが、外には出られません。

まず、シャワールームで除菌シャワーを浴

びていただきます。
その後新しい下着や服に着替えます。
生理用品もあります。
お部屋は1家族1部屋あります。
トイレもシャワーもあります。
朝7時、昼12時、夕方6時に食事のチャイムが鳴りますから、大食堂へ集まってください。
赤ちゃんの合成ミルクや離乳食もあります。
赤ちゃんのおむつや、ご婦人の生理用品も、食事を終えて部屋に戻るときに、出口に用意してありますから、自由にお持ち帰りください。
出口に医師も常駐していますから、不具合のある方は申し出てください。
手当てをしてもらえます。
それではどうぞ」

○競技場芝生広場

防護服に身を包んだ看護師たちが人々を誘導。

観覧席中央下の検疫室に、一家族づつ招じ入れ、検疫開始。

○西カンドール中国基地

ドローンが帰ってくる。

ジェシーと鉄男降りてくる。

ローレン「どうだ、問題なく送り届けたが？」

鉄男「はい、うまくいきました」

ローレン「そうか、それはよかった。それじゃつぎの人たちを乗せてもいいか？二人とも疲れてはいないか？」

鉄男「大丈夫です」

ローレン「この分で行くと、1日3回25日で終われそうだな」

鉄男「もう少し1日の飛行回数を増やしてもいいですが」

ローレン「いや、何があるか分からない。無理は裂けたい。

今日３回の飛行が終わったら、東キャナルで泊まりなさい」

鉄男「わかりました、じゃあ」

ローレン「うん、いってらっしゃい」

○杉田龍之介の家（外観）

○杉田の居間（夜）

杉田「西カンドールと３回も往復したのか。疲れただろう」

鉄男「いいえ、宇宙で３８万ｋｍ跳ぶより楽です。それに今日３回のテレポートでは、たくさん小さな子供たちが乗っていて。楽しかったです」

杉田「そうか。ところで岡田、お前は何歳になる」

鉄男「１００何歳でございましょうか」

杉田「いや、タイムスリップからの時間は除いて」

鉄男「それなら３３歳でございます」

杉田「もうそろそろ結婚した方がいいんじゃないか」

鉄男、同席していたアナベルをチラッと見て

鉄男「その話はまた後日」

杉田「なぜだ」

静「あなた、場をわきまえないと」

杉田「なに」

静、こっそりアナベルのほうに目配せを。

杉田「ああ、そうか、これはすまん、すまん」

アナベル「どうか私にお気遣いなさらぬように。

私はもう夫婦生活にはなじめません。

ですから、私に構わずどうぞ岡田さんのお話を続けてください」

杉田「そうか・・・」

場が重苦しくなる。

鉄男「ところで、西カンドールというところは、大変美しいところです。

温暖化で、草も生え、緑の水の流れるマリネリス渓谷は、空の緑とともに緑一色の世界です。

誰が植えたのかコスモスも咲いていました」

静「それはここ東キャナルの環境課の人たちが植えました。

風の強い日に上空から種を蒔いたのです。

そんな遠くまで種が飛んだのですね」

鉄男「それは驚きです。

ともかく生活基盤が整っていたらすみたくなるような場所です」

アナベル「まあ、本当に？　」

鉄男「ええ」

アナベル「どうでしょう、一度そこへ連れて行ってもらえませんか」

鉄男「さあ、ローレンの許可が下りるかどうか」

アナベル「ぜひ」

杉田「彼女がそこまで言っておるのだから、聞いてみてはどうか」

鉄男「そうですね。
おおよそ事が収まった後でなら」
静「よかったね、アナベル」
アナベル「ええ」
とほほ笑む。
鉄男M「そういえばこの人が笑うのは初めて見た。
気分転換にもいいかもしれない」

（移住開始から２４日目）
○西カンドール中国基地
○中国軍作戦室
朱「今日は岡田さんは？」
ローレン「友人の女性を、カンドール・カズマの観光に連れて行っています」
朱「今日は移住はお休みですか」
ローレン「ええ、彼も連日のテレポートで疲れているでしょうから」
朱「あと１回テレポートすれば終わります。
何事も無ければいいのですが」

と、その時激しい銃声が聞こえてくる。

ローレン「何事だ」

朱「失礼」

朱、駆けて部屋を出る。

○中国軍武器弾薬庫

小高い崖の上の洞窟にある弾薬庫。

周「どうだ、朱のやつらの反応は？　」

張「見張りの者たちが、右往左往しています」

周「反撃はなかったか？　」

張「ええ、今は」

周「反撃してきたら、もっときつい一発をお見舞いしてやるか」

○朱の監視基地

武器庫の正面の、やはり小高い尾根。

岩に隠れて銃を構える兵士たち。

そこへ朱が飛んでくる。

朱「おい、今のはどっちが撃った！　」

兵士A「むこうです」

朱「弾薬庫からここまで６００ｍ以上ある。
殺すつもりで撃ってきたのではないだろう。
ＱＢＺ１９５は射程４００ｍだから。
おそらくこっちの反応を探るためだろう。
むだに応戦するんじゃないぞ。
弾の数は向こうの方が多いんだから」
兵士Ａ「撃っちゃいけないんですか」
朱「そうは言ってない。
向こうの兵士には、君達の親類もいるはず
だから、殺すに忍びない。
もし、射程内に攻めてきて撃ってきたら、
単射モードで、足を狙え。
殺すんじゃないぞ。
周以外は」
　　そのとき、小道を辿って、女と子供た
　　ち９人が登ってくる。
朱「あっ！　黄月（フウアンユエ）（３９　黄李（フウアンリ）の妻）」
黄「朱さん！　」
朱「どうした！　」
黄「夫が、お前たちは移住しろと。

俺たちに未来は無いからと」

朱「そうか、それで仲間の妻子を連れて来たんだな。

よし、広場へ行こう」

と先導して基地の広場へ

○マリネリス渓谷の水辺

鉄男とアナベルが岸辺を散策している。

アナベル「空が緑色でなかったら、地球に戻ってきたみたい」

鉄男「良かったですか、ここへきて」

アナベル「ええ、ほんとによかった」

そのとき、遠くからかすかな銃声。

鉄男「なんだ？」

アナベル「発砲のようね」

鉄男「たいへんだ。

すぐ戻ろう」

すぐにアナベルの腕を取り、テレポート。

○中国基地・ドローンのそば

アナベルと鉄男、現れる。

ドローンの傍にはジェシーとローリン。

そこへ朱が駆けてきて、

朱「ローリンさん、移民団を乗せてすぐ飛んでくれませんか。

周たちが発砲しました。

何をするかわかりませんから」

ローリン「そうですね。

じゃ、乗り込ませてください」

朱、兵舎の方へ手を振って合図する。

すると、周から逃げてきた十数人の人々人が急いでやってくる。

ローリン「君たちの中でジュネ教の信者は居ますか」

中国人たちは顔を見合わせて、そして首を横に振る。

ローリン「信用しよう。

さ、乗って」

朱「人数が１６人ですがいいですか」

ローリン「上空へ浮かび上がりすれば、テレポートで向こうまで行けるから大丈夫です」

そうしてジェシーとローリンも乗船。

鉄男「アナベル、君も乗って」

アナベル「すぐ帰ってくるのでしょう。だから私はここにいます」

鉄男「・・・、そうか、じゃあ」

鉄男も乗り組む。

すぐにドローンは上空へ。

そして消え去る。

○東キャナル陸上競技場

着陸したドローンから中国人たちが降りて、検疫室へと移動している。

シングルトン市長「ローリン、これで終わり？」

ローリン「いいえ、追加の移住者が加わりましたから、あと1回です」

シングルトン「そう。

岡田さん、一休みしていってね」
鉄男「いや、そうもしていられません。
周が攻撃したのはお聞き及びでしょうか」
シングルトン「いいえ」
鉄男「そうですか。
連絡が遅れていますね。
あちらは大混乱で、連絡どころではないのでしょう。
まだ具体的な攻撃の様子はないのですが、
あいつらは銃を撃ちまくっています」
シングルトン「岡田さん、あちらへ帰るのはやめたらどう？」
鉄男「まだ移住者の最後のグループが残っていますし、アナベルも・・・」
シングルトン「そうね。
そうよね。
じゃ、くれぐれも慎重に」
鉄男「はい」
傍で聞いていたユーアンが、ジェシーに向かって

ユーアン「ジェシー、今度は俺が操縦する」
ジェシー「なにを言ってるんだ。
今日は俺の番だ」
ユーアン「だめだ。
俺はアナベルを助けに行く。
判ってるだろ、俺が惚れているのを」
ジェシー「そうなのか。
それは知らなかった」
ユーアン「だから交代してくれ」
ジェシー「よし、わかった」
ジェシー、ヘルメットをユーアンに渡す。

○西カンドール中国基地
ドローンが降りてくる。
鉄男「ユーアン、ここで待っていてくれ。
人員がそろい次第すぐ飛び立つから」
ユーアン「わかった」
鉄男「ユーアン、君。
ジェシーに嘘をついたね」

ユーアン「え」
鉄男「アナベルに惚れているってこと」
ユーアン「ああ、ばれてたか。
まるっきりの嘘でもないけど。
なに、ジェシーには妻子がいるけど、俺は
独り身だから」
鉄男「ありがとう、ほんとに」
鉄男、ドローンを降りる。
駆けてきた朱。
朱「早かったね、有難い」
鉄男「逃げてきた周派の妻子も運んだし。
じゃ最後のグループを乗せて」
朱「あ、いや、それが」
鉄男「どうしたんですか」
朱「最後のグループというのが、私の部下の
兵士たちなんだ。
彼らは、武器弾薬庫の周のグループと敵対
していて、ここへ来ることができない」
鉄男「でも、いつまでもそんな状態じゃ・・」
朱「わかってる。

ちょっと考えさせてくれ」

鉄男「アナベルは？　」

朱「移住審査に落ちた女性グループのケアに当たってくれている」

鉄男「ああ、彼女たちが居たか。審査に落ちた人たちは、なにが引っかかったんですか？　」

朱「彼らがが合格しなかった主な理由は、ジュネ教の熱心な信者だからなんだ。ジュネ教は暴力を肯定し、女性を虐(しいた)げ、宗派から離脱すれば殺される恐ろしい宗教なんだ。彼らを東キャナルに入れれば、将来社会を分断する可能性がある」

鉄男「全員が信者ですか」

朱「いや、みんながみんなではないが」

二人とも、ドローンのタラップに座り込んで、しばらく考え始める。

ふと、思い出したように、朱は腰に下げた水筒を取り上げ、蓋にお茶を注い

で鉄男に渡す。
鉄男、目で礼を言って、一息に飲む。
朱もその蓋に茶を注いで飲む。
鉄男「じゃこういうのはどうでしょう。
こちらの防衛線に銃とヘルメットをたくさん並べて、たくさんの兵士がいるように見せかけては」
朱「そうだな。
うん、旨く行くかもしれない。
やるとしたら夜だ」

○朱たちの防衛線の尾根（夕方）
朱「たくさん持ってきたヘルメットと銃を、それらしく立てかけろ。
そうだ、それでいい。
じゃみんな岡田さんとドローンまで走れ」
張「朱さん、あなたは？」
朱「ときどき銃を撃って、人が居るように見せかける」
張「そんな」

朱「船長は最後に船を離れるんだ。
わかったか」
張「でも」
朱「早くいけ。
お前が新しいリーダーだぞ」
張「・・・・・はい」
鉄男「じゃ」
と敬礼して、後ろを振り向きながら駆けてゆく。

○中国火星基地。ドローンの傍
遠くから兵士たちが駆けてくる。
ようやくの思いでたどり着く。
張「出発できますか」
鉄男「いつでも」
張「じゃ、みんな乗れ」
彼らが乗船し終わった時
ユーアン「朱さんは？」
張「たくさん兵士がいるように見せかけるため、時々場所を変えて銃を撃つそうです」

ユーアン「なんと」
張「副司令官は頑固な人だから」
ユーアン「そうか、そうだろうな。
しかたがない、飛ぼう。」
ユーアン「ＯＫ！」
ドローンは上空へ。

○朱の防衛線の尾根（夜）
朱がたいまつに火を点けて、等間隔に
岩の間に立てかける。
想い出したように、肩から下げた銃を
撃つ。
呼応して周の陣地から銃が連射される。
こうして夜は更けていく・

○朱の防衛線の尾根（朝）
突然、尾根の上り路から、周が現れる。
銃を朱に突き付けながら
周「おい」
朱「えっ？」

驚く朱。

周「お前、こんな小細工をしてたのか。

なにか様子がおかしいと偵察に来てみたら」

朱「周、この西カンドール・カズマにはほとんど人は残ってないぞ。

みんな東キャナルへ移住した。

いい加減あきらめろ」

周「なにを。

おい、王、女を連れてこい」

すると王が一人の女を連れてくる。

朱「あっ、その人は！　」

王「審査で振り落とされた女だ」

周「今からこの女を処刑する。

されたくなければ銃を捨てろ」

と女を引き寄せて、腰の拳銃を抜き、

女のこめかみに当てる。

王は自動小銃のねらいを朱に定める

朱「なんと卑劣な！　」

と、そのとき鉄男が朱の後ろに現れる。

鉄男「心配になって、東キャナルから引返し

てきました。
朱さん、銃を捨てるんじゃないですよ」
周「もう銃を持つ手がしびれてきた。
撃つぞ」
と、そのとき周の右近くにアナベルが
現れる。
アナベル「銃を下ろしなさい。さもないと」
周驚いて銃を声の方に向ける。
その一瞬、アナベルの太刀が閃き。
周の銃を持つ手を、手首から切り落と
す。
手首から血が噴き出す。
王が銃口をアナベルに向け、発砲。
弾はアナベルの胸に当たり、倒れる。
次の瞬間、鉄男は王の前に跳び、王の
みぞおちに小太刀を突き刺す。
あっという声と共に、体の自由を失っ
た王も、周の隣に倒れ、こと切れる。
茫然とする女は、ふと気が付いたよう
に尾根の道を懸け降りる。

鉄男、アナベルに駆け寄り、助け起こす。

アナベル「岡田さん、さよなら・・・」

こと切れるアナベル。

鉄男、アナベルを抱きしめて嗚咽。

朱「岡田さん」

鉄男「・・・・」

朱「どうなさいますか」

鉄男「明日の朝、この人をカンドール・カズマの川の岸辺に埋葬してきます。今日はドローンまで連れて帰って供養します」

朱「わかりました」

鉄男、アナベルの体を抱いてテレポート。

○中国軍基地広場（夜）

鉄男、アナベルの遺骸をドローンの中に横たえる。

朱もその場で手を合わす。
その時、西の夜空に轟音と共に火柱が
二度、三度。
朱「武器庫がこれで無くなりました・
時限爆弾を仕掛けました」
ユーアン、バッグからウィスキーを取
り出し、コップに注ぐ。
それを鉄男と朱にも渡し、
ユーアン「供養の酒です。
思えば幸せ薄い人でした」
またもや鉄男の目から涙。

○カンドール・カズマの緑の川のほとり（朝）
ユーアンと鉄男、掘った穴の中に、
白いシーツに包んだアナベルの遺骸を
下ろし、土を掛ける。
続いて朱も、残りの土を掛ける。
そして、３人で合掌して頭を垂れる。
ユーアンと鉄男の涙が止まらない。
そよ吹く風にコスモスが揺れる。

画面はフェードアウト。

画面は同じ墓地にフェード・イン。
カメラは右へパンして、ドローンの着陸をとらえる。
着陸したドローンから、鉄男、龍之介、静、渡辺浩一（３６　マーズ５１号船長）、渡辺春（３６　浩一の妻）、ニック・フォード（３０　パイロット）タマラ（３１　ニックの妻　医師）、ユーアン、ジェシー、ステフ、キャリー、ジョンが降りてくる。
一行は坂を下ってアナベルの墓の前に。
鉄男、抱えていた鉄の墓碑を墓の前に下ろす。
墓碑には「我らが愛するアナベル・ヴァルツ　２１４１年没」の文字。
一同頭を垂れて、黙祷。
思い出したように静が荷物から箱を

取り出し、鉄男の手を借りて墓碑の前に埋める。

キャリー「それ、なあに」

静「小さい刀よ。天国へ行っても、自分の身を守れるように」

ひとしきり鉄男が嗚咽。つられてみんな泣き出す。

一人キャリーは不思議そうにみんなを見ている。

ステフ「テッツオ、あなたこの人に良くしてあげたわ。彼女も苦しみから解き放たれて、天国でほほ笑んでいるわ」

鉄男「いや、ここカンドールに連れてこなければ・・・」

龍之介、鉄男の肩を抱いて、

龍之介「言っても詮(せん)無い事。気持ちはわかるが、もう忘れようぞ。こんな緑に囲まれた場所で眠れるとは、幸せかもしれぬ」

ジョンが小さな袋に手を入れ、取り出した小さい粒を、墓の周りに撒いてゆく。

ジョン「キャリー、君も撒くかい」

キャリー「なにそれ」

ジョン「花の種だ。

ポビーにデイジー、スイトピーにネモフィラ。

来年また墓参りに来よう。

きれいだぞ」

キャリー「うん」

と小さい手に種を掴んで撒いてゆく。

一陣の風がコスモスを揺らす。

おわり

テレポーテーション・マン４に続く